

高齢者医療の第一人者、大内尉義センター長に聞く **特別対談**

南風病院 **高齢者・健康長寿医療センター** から全国へ

東大名誉教授で虎の門病院顧問(前院長)の大内尉義先生をセンター長に迎え、2022年1月にオープンする南風病院「高齢者・健康長寿医療センター」。総合的な高齢者医療センターを地域基幹病院が開設するのは日本初の試みで、日本の高齢者医療のモデルケースとなることが期待されています。「BSニュース」(NHKB)のキャスターでおなじみの阪田陽子さんが話を聞きました。



フリーアナウンサー  
阪田陽子さん

高齢者・健康長寿医療センター長  
大内尉義先生

**全身を診るのが 高齢者医療**

阪田 先生は東京大学医学部を卒業後、第三内科を経て1986年に東大病院の老人科(現・老年病科)に移籍、高齢者医療の道を歩んでいらっしやいます。「日本老年医学会」や「日本老年学会」では理事長も務められ、2014年には「フレイル(P2参照)」という概念も提唱するなど、日本の高齢者医療の第一人者として尽力されていますが、先生が高齢者医療と関わられたきっかけはどのようなものだったのでしょうか?

大内 特別な思いがあったわけではなく、老人科からお誘いがあったのがきっかけです。当時は高齢化がまだ深刻でなかったこともあり、東大病院に老人科がある意味もよくわかっていまして。ところが、老人科での医療は一般の内科医療とはまったく違っていました。内科のようにひとつの病気を診断して治療し、良くなれば退院というわけにはいきません。ひとつの病気の治療がほかの臓器に影響を与えることもあり、常に全

症ではないので、そこをしっかりと鑑別して、認知症であれば治療をするというのがこの外来です。ジムの隣にはカフェが設置されていますが、認知症の方やご家族が集い、コミュニケーションと情報交換の場となる「認知症カフェ」の機能も備えています。

阪田 3つ目の「脊椎仙腸関節外来」は聞きなれませんがどのようなものですか?

大内 上半身と下半身を結ぶ複数の筋肉に覆われている仙腸関節は、歩行に大切な関節です。以前から南風病院の整形外科の先生が中心になり、腰痛やロコモに特化した腰痛・仙腸関節センターを開設、多くの患者さんの治療をしてきましたが、今回、高齢者・健康長寿医療センターの一部門として機能するようになりました。

**健康な人もフレイル 予防に利用を**

阪田 健康寿命を延ばす目的という点ですと、健康な人も利用できるのでしょうか?

大内 はい。当初は「高齢者医療センター」という名前での総合的な医療センターです。

阪田 健康な人もフレイル予防などに利用していただきたいということから「高齢者・健康長寿医療センター」という名前にしたわけです。

大内 最後に、地域の皆様にメッセージをお願いします。



**INFORMATION**

【センターオープン日程】  
2022年1月11日(火)

【診察日】  
月~金  
休診日/土・日・祝日・年末年始

【診療科】  
老年内科(ロコモ・フレイル・生活習慣病外来)  
脳神経外科(もの忘れ外来、頭痛外来)  
整形外科(脊椎仙腸関節外来)

【電話番号】  
代表:099-226-9111 予約電話:099-805-2259

【住所】  
〒892-0852  
鹿児島県鹿児島市下竜尾町6番18号



センターまでの所要時間

JR >>>>>>> 鹿児島中央駅下車/車約15分  
鹿児島駅下車/車3分・徒歩10分

市電 >>>>>>> 桜島橋通り電停下車/徒歩5分

市バス >>>>> 11番線(下竜尾町バス停下車)

桜島橋橋 >>>>> 車3分・徒歩15分





**高齢者・健康長寿医療センター長 大内 耐義 先生**  
 昭和48年、東京大学医学部卒業、内科研修の後、東京大学第3内科に入局し循環器病学を専攻。昭和60年米国テネシー大学生理学教室に留学し、高血圧の基礎的研究に従事。翌年帰国後、東京大学老年病学講師、次いで平成7年同教授に就任。老年医学、循環器病学、骨代謝学、認知症学の診療、研究、教育にあたった。平成25年、国家公務員共済組合連合会虎の門病院院長を経て、現在同病院顧問。平成17年～27年日本老年医学会理事長、平成19年～25年日本老年学会理事長を勤めた。

**阪田** 具体的にはどのような診療内容になりますか？  
**大内** 「老年内科」「もの忘れ外来」「脊椎仙腸関節外来」の3つがあります。  
**オーダーメイドの予防プログラムを提供**  
 療を24時間体制で行う急性期病院の「南風病院」が隣接しているのです。そこでも連携し、万全な体制をとっていただけるのも大きな特徴です。

**センターの役割は健康寿命を延ばすこと**  
**阪田** 設立の目的をどのようにお考えですか？  
**大内** 日本は今、「超高齢社会」に突入しつつあります。感

身のことを考えなければなりません。また、病気は治療できても、「ご飯を食べたりトイレに行ったりする」という生活機能が失われてしまつてはしたくない。そこに気付いたとき、高齢者医療の専門科の意味が分かり、同時に重要性に目覚めました。以来35年、高齢者医療に携わっています。  
**阪田** そしてこの度、「高齢者・健康長寿医療センター」のセンター長をお引き受けになられたわけですね。  
**大内** 大学病院やナショナルセンターなどではなく、地域の基幹病院が高齢者医療の総合的な拠点を設立するのは日本初で、私たち高齢者医療に携わる者にとつての目標でもあります。センター長のオファーをいただき、集大成として私の軌跡のすべてをつぎ込みたいと考えています。

「老年内科」は、高齢者の健康寿命を障害する大きな要因のフレイルやロコモ、さらにそれらの危険因子となる生活習慣病などに対応するものです。特にフレイルを重視して、予防プログラムには、栄養、筋力トレーニング、口腔ケアを用意しています。  
 まず利用者の食生活を解析し、食事指導をします。フレイル

ル予防にはたんぱく質が大切ですが、歯の悪い方に肉をたぐさん食べてもらうのは難しいので、植物性のたんぱく質なども併せて、バランスよく食べられるよう献立のアドバイスをを行います。筋力トレーニングはその人の体力に合わせたプログラムを用意し、併設のジムでプログラムを実践、筋力の低下を防止します。また、嚥

## 医師をはじめ、多職種が関わり、全身を診て健康寿命を延ばします。

大内先生



阪田さん

## 日本初の試みとしてセンターへの期待はとて大きいですね。

### KEYWORD

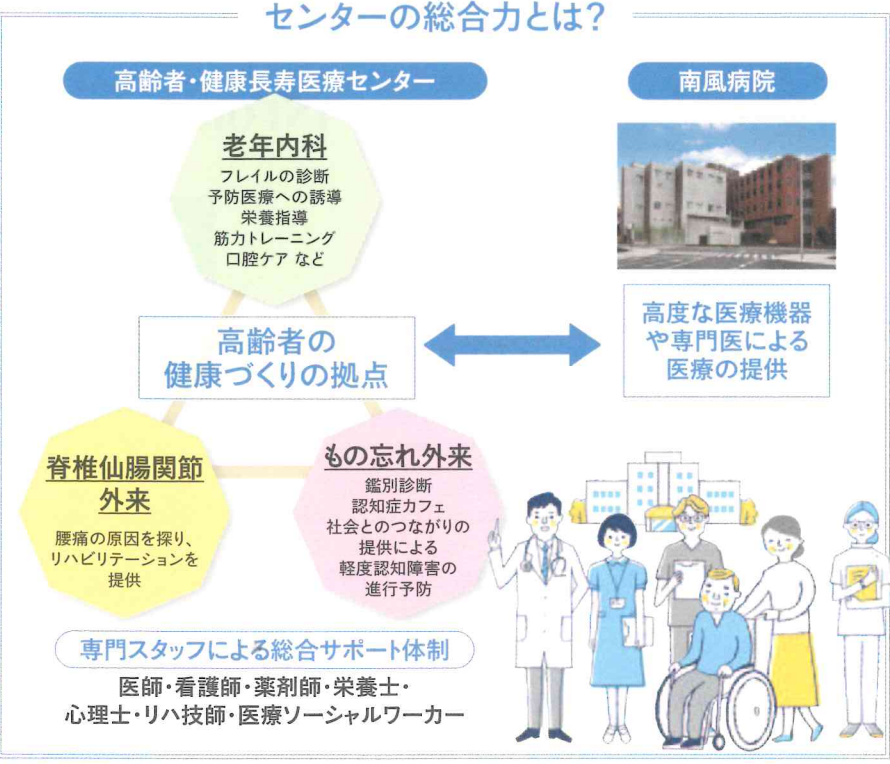
**【フレイル】**  
 加齢によって筋力、認知機能などが低下し、生活機能障害や要介護状態、死亡のリスクが高くなる状態のことで、「健康な状態と要介護状態の間」としてとらえられる。65歳以上のシニアのうち、約5割がフレイルの前段階となるプレフレイルに該当すると考えられる。<sup>\*1</sup>

**【ロコモティブシンドローム(ロコモ)】**  
 運動器の障害により、立つ・歩くなど移動機能の低下をきたした状態。運動器とは、骨・筋肉・関節・靭帯・腱・神経などの身体を動かすために関わる組織や器官のこと。要支援となる原因の約5割を「関節疾患」「高齢による衰弱」「骨折・転倒」が占めている。<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup> 令和元年「老年症候群に関する大規模コホート研究」(国立長寿医療研究センター)  
<sup>\*2</sup> 令和元年 厚生労働省 国民生活基礎調査

めない・飲み込めないという口の機能がフレイルの要因になる場合もあります。飲み込む力や嚥む力をアップさせるための訓練を行うなど、原因に合わせたケアを行います。  
**情報交換の場となる「認知症カフェ」も併設**  
**阪田** 「もの忘れ外来」では専門医による診断や治療が提供

されるということですが、ネーミングがいいですね。認知症外来だと、親は行きたがらないものです。  
**大内** そうですね。私の亡くなった母も認知症外来には行きたがりませんでした(笑)。認知症は高齢者医療の重要な分野で、センターの活動からは切っても切り離せないものです。ただ「もの忘れ」認知



**センターの総合力とは？**  
**大内** 高齢者医療においては、これまでの診療科別の縦割の体制から、診療科を横につなげて総合的な医療へと変える必要があります。現在は、たとえば呼吸が苦しいからと呼吸器内科に行っても呼吸器に問

えてください。  
**阪田** 団塊ジュニアが65歳以上になる2040年も見据え、初の試みとなる「高齢者・健康長寿医療センター」への期待は大きいと思います。改めて、センターの特徴を教えてください。  
**大内** 高齢者医療においては、これまでの診療科別の縦割の体制から、診療科を横につなげて総合的な医療へと変える必要があります。現在は、たとえば呼吸が苦しいからと呼吸器内科に行っても呼吸器に問

染症などの急性疾患や生活習慣病などの克服に力を入れ、また誰もが良質な医療に容易にアクセスできる保険制度を整え、急速に寿命が延びました。しかし、「平均寿命」と介護を必要としない「健康寿命」の差は、男性が8・8年、女性は12・4年もあります。自立して生きていけないこの期間を、いかに縮めるかが現在の医療の大きな目標です。そのためには、要介護にならないよう全身の臓器や生活機能など総合的に診ることが必要で、このセンターの役割はまさにそこにあります。

**フリーアナウンサー 阪田 陽子さん**  
 NHK-BSニュースキャスター。人間科学修士・認定心理士。コミュニケーションを専門にしたビジネスコーチとしても活動。対象は、経営者・企業幹部の他、国家機関や医療組織など。公益財団法人大原記念労働科学研究所協力研究員。

